

## 難波西鶴と

## 海の道

【52】

森田 雅也

前回まで、長崎の丸山遊郭へと京都へと下ってきた世之介の話をしていました。

長崎は郭ばかりではありません。世間胸算用『元禄5(1692)年刊』巻四の四「長崎の餅柱」には、商人の話が出てきます。

「霜月晦日切に、唐人船残らず湊を出て行けば、長崎も次第に物さびしくなりぬ。しかしこの所の家業は、よろづ唐物商ひの時分銀

まふけて、年中のたぐはへ一度に仕舞ひ置き、貧福の人相応に緩々といくらし、万事こまかに胸算用をせぬところなり。大方の買物は当座ばらひにして、物前の取りやりもやかましき事なし。正月の近づくころも、酒常住のたのしみ、この津は身過の心やすき所なり」

当時、長崎に交易でやってくる唐人(中国人)の船は、入港する時期が、春船、夏船、秋船と分かれていました。本来秋船は9月20

日が最終の帰路船でしたが、寛文8(1668)年以降は、自然の風向きが悪くなってしまう、霜月未まで待つ帰国する船も増えてきたということです。中国の商人たちが帰ってしまうと長崎の町も寂しくなり、景気も冷え込んでしまいます。しかし、長崎の商売人は、すべて外国貿易のできる期間にもうけてしまっ、1年間の蓄えをしまします。

江戸時代の人々は、年貢のように年収制度

## 商人の暮らしぶりいかに

で生活していました。誰もが正月に今年1年間、わが家がどのような收支決算となるか胸算用して生活設計することが大切だということ書かれたのが『世間胸算用』です。

「1年を20日で暮らす良い男」は相撲取りの生活をうらやむ言葉ですが、長崎の人は1年を11月で暮らす賢い人たちだと言っていますから、絶賛ですね。

さらに長崎の人々は、貧乏人も金持ちもゆるゆると暮らし、細かに胸算用しない土地だとするのです。窮屈ではなく、住みやすいですが、これも外国貿易での景気の良さが要因にあるのでしょう。加えて、長崎ではほとんどの買物物が現金払

いで、節季払いにしないと言っています。

当時の日本の精算方法は節季払いが一般的でした。いわゆる「つけ払い」として、節季と言っても盆正月前、特に師走にまとめて支払う方法をとっていました。現金払いの「都度払い」は信用のない人が支払う方法として割高でした。

このような現金払いを一般的とする長崎は特異ですが、これも外国貿易を主軸としている地だからでしょう。そのため、師走でも掛け取りに走ることもなく、酒を飲みながら、ゆとりある日々を送る長崎。まさに暮らしやすい所ですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 郭ばかりでない長崎